

ソグドの神々とイスラム・アラブの侵攻

小谷 仲 男

I タバリーの歴史

イスラム・アラブの勃興とその征服活動については、バラズリー *al-Balādhurī* (d. 284/892) : *Futūḥ al-buldān* (諸国征服史) と、タバリー *al-Ṭabarī* (d. 310/923) : *Ta'riḥ al-rusul wa-l-mulūk* (預言者と諸王の歴史) が主要なアラビア語史料である。バラズリー『諸国征服史』については、P. K. Hitti が英語訳を早くに出版していた。タバリーの『預言者と諸王の歴史』については、1985年より英語訳が刊行されはじめ、現在の時点では全巻38冊のうち、35冊の翻訳が出版された(5, 8, 16巻は未刊)。各巻には翻訳担当者の解説と、テキストに即した地名、人名、研究文献などの簡潔な脚注、巻末には参考文献目録が載せられており、はじめてタバリーの歴史に接する人びとも便利にできている。タバリーとバラズリーは同種のアラビア語史料であっても、分量的にタバリーの歴史はバラズリーの20倍程度あり、通読は容易ではない。今回の『タバリーの歴史』の翻訳においても、原則として各巻で担当者がとなり、重複担当者を除いても約30名の専門研究者が動員されている。

これまでアラビア語に不慣れな私は、Bal'amī がペルシア語に要約したタバリーの歴史のフランス語訳(H. Zotenberg : *Chronique d'Abou Djafar Mohammed ben Djarīr ben Yezīd Tabarī*. 4 tomes, Paris 1867-74) で内容をうかがい知るとどまっていた。タバリー全巻の現代語訳は私にとってまさに待望の書である。翻訳文中にはなお原文難解、試訳にとどまると注記された部分も存在するが、骨の折れる翻訳遂行に努力された諸氏に十分な敬意をはらいたい。今回私は英訳タバリーを入手して、イスラム・アラブの中央アジア征服を中心に通読してみた。翻訳書 Vols.XV—XXVI に相当する。まずその情報量の多さに驚嘆した。これまで文献史料の極端に少ないインド古代史やバルチア、ササン朝ペルシア史を考えた私には、とくにその印象が強かった。イラン東北部および中央アジア(ホラーサーン州)に関するタバリーの所伝は、ほとんどバグダードの歴史家マダーイニー 'Alī b. Muḥammad al-Madā'inī (ca. 753-846) の著作に基づくといわれており、のちに引用する史料も多くはマダーイニー('Alī) の手を経由した伝承であった。マダーイニーはその伝承の多くを事件の当事者、あるいは目撃者の証言にまでさかのぼり、ときには第一人称の主語ではじまる文章が、そのままの形で私たちに提供される。それが戦争記録のようなばあいであれば、臨場感と迫力あふれるものとなる。イスナード(伝承の鎖)がイスラム歴史叙述の特色でもあるが、ときには伝承者の記憶

違いや、それがとくに部族ごとの伝承であれば、身びいきなどによる誇張や潤色がまぬがれない。タバリーは伝承経路を明確にさせながら種々の情報を並記する方針をとり、自己の考えで必ずしも事実をひとつに絞っていない。ひとつの事実に対し、さまざまに伝承されること自体に歴史的意味が秘められていることを考えれば、私たちはタバリーの鷹揚さと、結果としての情報量の豊富さにむしろ感謝すべきであろう。

以下に主としてタバリーの記述によりながら、イスラム・アラブ人たちが中央アジアに侵攻した時、そこで出くわした人びとの宗教、そしてアラブ人たちがそれらにどのような対処をしたか調べてみたい。

II ヤズデゲルド3世の殺害

ササン朝ペルシアの最後の皇帝となったヤズデゲルド3世(A.D. 632-651)は、在位年数こそ比較的長い、ほとんどアラブの追跡をのがれる逃亡の生活で一生を終えた。632年、クーファ付近のカーディスイーヤの戦いでペルシア帝国軍隊はイスラム・アラブ軍に敗北を喫し、即位したばかりのヤズデゲルド王は他のペルシア人と共に首都クテシフォン(マダーイン)を捨ててイラン高原に逃走した。642年、イラン高原の中央部のニハーヴァンドでササン朝ペルシアは再度軍隊を結集し、イスラム・アラブの侵攻阻止を企てた。双方ともに多数の死傷者を出す悲惨な戦闘であった。タバリーの記述するニハーヴァンドの戦いを讀むと、勇ましく戦ったアラブ戦没者たちの名簿、あるいはかれらにささげる追悼録の印象さえ受ける。結果はササン朝ペルシアの中央軍隊の壊滅であり、中央政府の権威崩壊であった。ヤズデゲルド王はレイからイスファール、そしてイスタフル(ペルセポリス)へと逃走を続けた。その間ゾロアストラ教の聖なる火(nār)をたえず携えていたと伝えられるのは、ササン朝ペルシア皇帝が同時にゾロアストラ教の宗教的儀式を行なう最高位の神官でもあったことを意味する[*Tabarī* I, 2682, tr., Vol. XIV, p.52]。聖都イスタフルも安住の地ではなくなり、ヤズデゲルド王は若干の軍隊と従者をつれて、ケルマーンをへてシースターンに逃れ、さらに北上してホラーサーンの州都マルヴ(Marw)に向かった。一方、カリフのウマルはクーファのアラブ軍とバスラのアラブ軍を、北と南の二方向からそれぞれホラーサーンに向け派遣した[Fig. 1]。

当時ホラーサーン州の総督(marzubān)はMāhawayhというペルシア人であった。ヤズデゲルド王はMāhawayhに資金を要求した。しかしかれは敗残のヤズデゲルド王をみかぎり、援助を拒否したばかりでなく、さらにヤズデゲルド一行を殺害する計画をたてた。それに対し、すべてのペルシア人が賛成したのではなかった。マルヴのゾロアストラ教の神官(mawbādh)は、「宗教と王権は表裏一体のものである。片方は片方なしで存在することはできない。ヤズデゲルド王を殺害する行為は、神聖なものを汚す(大罪)」として、総督に思い止まるように忠告した。しかしMāhawayhはマルヴの兵士にヤズデゲルド王一行の殺害を命じた[*Tabarī* I, 2874, tr., Vol. XV, p.80]。

タバリーはヤズデゲルド王殺害の経過について、諸説あることを指摘する。それらの伝承の一致するところは、ヤズデゲルド王が追跡のアラブ軍ではなく、マルヴのペルシア人の手で殺害されたことである。ヤズデゲルド一行を襲撃したのは、マルヴのペルシア兵のほか、トルコ族がホラーサーン総督の要請をうけてこれに加わったと伝えられる。1,000人あまりのヤズデゲルドの一行は逃散し、多くが殺害された。ヤズデゲルド王はひとり徒歩で逃げのび、ムルガブ河畔の水車小屋にたどりつく。そこでヤズデゲルド王は水車小屋の主人にみつき、一兩日中に主人の手で殺されたとも、主人の通報でペルシア兵に殺されたともいわれる。そして王の遺骸は河に投げ捨てられた。次に引用するタバリーの記述は、事件の後半に属するものである。河に投げ捨てられたヤズデゲルド王の遺骸の収容と埋葬に当たったのは、実はマルヴに居住するキリスト教徒たち(たぶんネストリウス派)であったという。

ヤズデゲルド3世の殺害と埋葬(『タバリーの歴史』, A.H.31/A.D.651)

マルヴの兵士たちはヤズデゲルドが身につけていた宝石装飾を取りはずし、かれを袋に納め、その口を縛った。そして弓の弦でヤズデゲルドを絞め殺し、マルヴの河に投げ込んだ。遺体は水に流されて Razīq 運河の河口まで運ばれ、木の枝に引っ掛かって止まった。マルヴの司教がそこにやってきて、遺体を運び去った。司教は麝香の薫りをたきしめた外套でヤズデゲルドの遺体を包み、棺のなかに納めて、それを Mājān の近くの Bā'y Bābān に運んだ。そして遺体をヴォルト屋根の部屋に安置した。それはかつて司教の接見室として使用されたものであった。司教はそれを壁で密閉した[*Tabarī* I, 2881, tr., Vol.XV, p.87]。

アフワーズ出身のイリヤー Iliyā' という人物がおり、当時かれがマルヴ Marw のキリスト教大司教であった。かれはヤズデゲルド3世の殺害のことを知ると、かれの教区のキリスト教徒(al-naṣārā)を集めて言った。「ペルシア人の王が殺害された。王は Kisrā (ホスロー2世)の孫、シャフリヤール Shahriyār の子である。シャフリヤールはキリスト教信者シーリーン Shirīn の子である。シーリーンがキリスト教徒同胞たちに与えた正しき行為と恩寵をあなたがたは知っているはずだ。ヤズデゲルドはキリスト教徒の血を引く王である。また私たちはかれの祖父 Kisrā の治世にキリスト教徒が受けた栄誉、ならびにその先王たちのうちからキリスト教徒が受けた善意をもあわせ思いおこすべきである。国王は人びとのために教会をいくつか建立し、またある同胞たちの負債をも肩代わりした。それゆえ、私たちが王の死を悼むのは適切なことである。王の寛容さは、かれの先祖や祖母シーリーンがキリスト教徒に対して与えた恩寵に匹敵する。そこで、私は王のために墓(nāwūs)を建立し、そこに王の遺体を運んで埋葬することが正しい行為と考える」と。

キリスト教徒たちは同意し、「大司教さま、私たちはあなたの命令に従います。あなたの指示に従って行動を共にします」と答えた。そこで、大司教はマルヴの教会庭園内に墓を建立するように注文した。そして自らはマルヴのキリスト教徒たちを連れて外出し、ヤズデゲルドの遺体を河のなかから引き揚げた。それを布で包んで、棺のなかに納めた。それから同行の

キリスト教徒たちがそれを肩に担いで運び、注文しておいた墓のところにまで持ってきた。遺体をその中に埋葬し入口を壁で塞いだ〔*Tabari* I, 2883, tr., Vol.XV, p.89〕。

上記二種の伝承は、メルヴのキリスト教徒たちが歴代のササン朝ペルシア皇帝、とくにホロー2世とその王妃で、キリスト教徒であったシーリーンから受けた恩顧を忘れず、ペルシア人が捨て去ったヤズデゲルドの遺体を自発的に收容し、丁重に葬ったことが記される。キリスト教徒側の伝承として幾分かの潤色があるかもしれないが、叙述が具体的、かつ詳細であるので、大筋において歴史事実であったと考えてよい。5, 6世紀当時からマルヴの町にネストリウス派キリスト教徒、及びその教会が存在したことは、他の史料から知られており、さらに1993年に The International Merv Project (the second season) が発掘調査したマルヴのエルク・カラ Erk Kala 城址から陶片に十字架を刻んだペンダント鋳型が発見されている¹⁾。このプロジェクトが開始される以前に、ロシア人考古学者の手でキリスト教会らしい遺構が発見されたといわれているが、その建物の機能、年代ともまだ不確実であり、したがってヤズデゲルドの遺体が安置されたという Mājan 付近の Bā'y Bābān の教会址はまだ確認されていない。

1960年代のはじめ、ロシアの考古学者たちは Erk Kala 城址の中に含んだギャウル・カラ Gyaur Kala の都城址の東南隅、および東城壁の外側とからふたつの仏教遺跡を発見した。泥レンガづくりの仏塔と僧院の跡をたどることができ、出土貨幣などから A.D. 4 ~ 6世紀に活動したものであることがわかった²⁾。イスラム・アラブ軍の侵入時にはすでに廃墟と化していたとおもわれる。城内の寺院址からは大きな仏頭(塑造)や彩画の壺とその中に納められてい

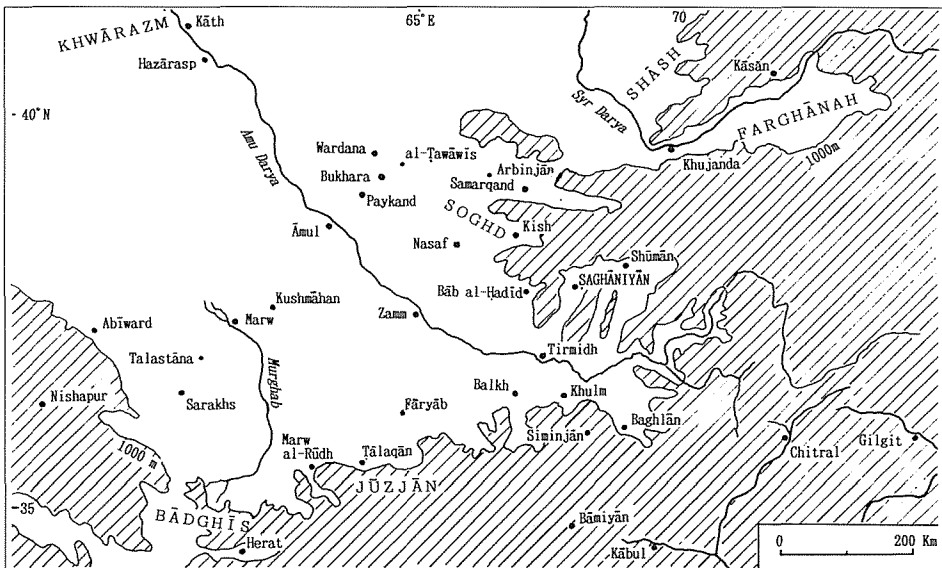


Fig. 1 地図 ホラーサーンとトランスオクシアナ(西暦8世紀初)
A Map of Khurāsān and Transoxiana in the Early 8th Century

たブルーミー文字経典など、城外の寺院からはガンダーラから運ばれたガンダーラ石彫が4片出土した。発掘者のプガチェンコーワ氏らは、当時マルヴに西北インドーマルヴを結ぶシルクロード貿易に従事した仏教徒の商人集団がいたのではないかと推定する。イスラム・アラブの侵攻当時のマルヴには、仏教徒の残存者がいたかどうかは不明であるが、ゾロアストラ教徒、キリスト教徒を主として、そのほかにさまざまな外国人とさまざまな宗教が混在していたことが予想される。

Ⅲ クタイバのブハラ征服

A.H.31/A.D.651-652年、ヤズデゲルド王の殺害直後、'Abdallāh b. 'Āmir の率いるバスラ軍がニーシャープールを経由してマルヴに入った。一方、Sa'īd b. al-'Āṣの率いるクーファ軍はゴルガン(Jurjān)にまで迫っていたが、バスラ軍がすでにホラーサーンに入ったことを知るとクーファに引き返していった。マルヴの住民はアラブに対して武力抵抗をせず、2,200,000ディルハムの貢納金とひきかえに講和を請い、アラブ軍もそれに応じた。'Abdallāh b. 'Āmir はマルヴを拠点に Ahnaf の部隊をトハリスターン(アフガニスタン北部)に派遣し、征服活動を遂行するが、なおその地域のイスラム・アラブ支配は恒久的なものではなかった。というのはその後まもなくアラブ帝国内部に、カリフの権限およびカリフの継承をめぐるアラブ人どうしのあいだで激しい戦争がくりかえされたからである(第一次内乱 A.D.656-661, 第二次内乱 A.D.683-692)。その間、中央アジアへの遠征は掠奪行為でいどにとどまった。ついで A.H.75/A.D.694, 第二次内乱の鎮圧に活躍したハッジャージュ al-Hajjāj b. Yūsuf がイラクならびに東方地域の総督に就任すると、事情は変わってくる。しかし着任早々にハッジャージュは、シースターン地方の鎮圧に派遣されていたイブン・アルアシュアス Ibn al-Ash'ath とそのイラク戦士たちの反乱に直面した。かれらと同じくシリアの中央政府に不満をもつクーファ、バスラの戦士たちも呼応し、ハッジャージュは苦境にたたされる。しかしハッジャージュはシリアから続々と援軍を引き入れ、4年の歳月を費やしてイラク在住のアラブ戦士の反乱を平定した(A.D.704)。こうしたアラブ部族間の対立感情と戦士の待遇に関する不満は、今後もアラブ人の団結をゆるがす結果になる。

A.H.86/A.D.705年にハッジャージュは東方辺境ホラーサーンの総督として有能な将軍クタイバ Qutaybah b. Muslim を派遣した。クタイバはホラーサーンの首都マルヴに到着したその日、ホラーサーンのアラブ軍隊を集め、団結して不信心者との聖戦を遂行するようにと演説した。「神はあなたがたをこの地にお下しになり、あなたがたの力でその宗教を強固にし、神聖なることどもを守護させるようになされた。またあなたがたの力で富を増やし、敵どもの苛酷なあしらいから免れさせようとなされた。……『聖戦で倒れた人を死者として数えるな。かれは主のみもとで、立派に生きている[コーラン、3 : 169]』。さあ、あなたがたの主の約束を遂行し、世界の最果て、苦痛の極限にまで赴け。安易な道をたどることを避けよ」と[*Tabari*

II, 1179, tr., Vol. XXIII, p. 127]。クタイバに課せられた役割は、豊かなホラーサーン地方の治安維持と現地住民から貢納を確保することであった。それによってホラーサーン駐留のアラブ戦士に十分な俸給を支給し、中央政府へその一部を納付することであった。

クタイバは着任したその年に、アム河の南岸(トハリスターン)に遠征し、ターラカーンやバルフのアラブ支配を再確認し、テルメズ Tirmidh の渡河地点からアームル Āmul まで舟で下り、マルヴに帰着した。その翌年87/706年、クタイバはザンム Zamm の渡河地点からアム河の北岸に渡り、ソグド人の土地に入る。ソグド人の大都市ブハラ Bukhārā への途中に、“商人の町 *madīna al-tujjār*”と呼ばれたバイカンド Paykand があり、クタイバはこの都市を武力で征服した。かれらは戦利品として多数の金銀の容器や偶像 (*al-aṣṅām*) を獲得し、それらを溶解して150,000 ミスカル (約660kg) の金銀塊を得たという [*Tabarī* II, 1188, tr., Vol. XXIII, p. 137, cf. *Narshakhī*, tr., p. 45]。これらの偶像がどのような神々の像であったかは不明である。またその町にはトルコ族に救援を要請した独眼の商人がおり、クタイバに対し自分の身の代金として中国産の絹500匹(時価100万ディルハム)を提供することを申し出たという。トルコ族と協同して中国と貿易する商人の姿がうかがえる。

バイカンドを征服した翌年の88/707年から、クタイバはブハラの征服に専念する。ブハラ自体が大きな都市であり、周辺にも小都市が点在し、またブハラの要請をうけ、トルコ族や他のソグド諸国がブハラの救援に駆けつけたので、戦闘は長期に及んだ。クタイバがイラクのハッジージュにブハラの征服を報告できたのは、90/709年になってからのことであった。しかしその年、早くにクタイバに服従し、ブハラの征服戦争に従軍していたトハリスターンの領主のひとり、ニーザク Ṭarkhān Nizak はクタイバの残忍な征服行為に対し恐怖を抱き、クタイバのもとを脱して反乱を企てた。このためクタイバはしばらくの間、ヒンドウクシュ山中に逃れたニーザクの追跡と、ニーザクと共謀したトハリスターン諸国、およびザブリスターン、シースターンの領主ズンビル Zunbil と戦闘を交えねばならなかった。ニーザクは生命の保障を得てクタイバに投降したが、クタイバは後難を恐れ、かれを殺害した。トハリスターン地方におけるニーザクの影響力の大きさがうかがえる。それゆえ、このニーザクをかつてのエフタル族の末裔と推定する研究者が多いが、今のところ確実な根拠はない³⁾。

IV クタイバのサマルカンド征服

93/711-712年、クタイバは再びソグド地方の征服に専念する。ちょうどその時、アム河下流域のホラズムの国王からクタイバに対し救援の要請がきた。国王に反対する勢力を取り除いてくれるならば、ホラズムの土地をクタイバに引き渡すという。要請状にはホラズム諸都市の三本の黄金の鍵が添えられていた。クタイバは冬期にホラズムに遠征し、国王の反対勢力4,000人を殺害し、多くの奴隷、黄金などとひきかえに、ホラズム国王と和平協定を結んだ。クタイバはホラズムからの帰途、突如サマルカンドへ軍隊を向けた。

サマルカンドはブハラと並んでソグド地方の大都会であった。ブハラがクタイバのアラブ軍に制圧された時、サマルカンド国王タルフーン Ṭarkhūn (突昏)は¹⁾、クタイバに使者を派遣して貢納を支払うこととひきかえに和平協定を請い、クタイバもそれに応じた。しかしサマルカンドの人びとは、それを屈辱と思い、クタイバがシースターンの遠征中に国王タルフーンの王位を剝奪し、若いグーラク Ghūrak (烏勒伽)を国王とした。したがってアラブとの協定も破棄されていた。クタイバはサマルカンドの人びとの油断をみすまして不意をついた。以下、タバリーが記述するサマルカンド征服の様態を訳出する。

クタイバのサマルカンド征服(『タバリーの歴史』, A.H.93/A.D.711-712)

‘Ali は語った。クタイバ Qutaybah は20,000人の兵を伴ってソグド Sughd (サマルカンド)に到着した。すでに ‘Abd al-Raḥmān が先行して到着していた。‘Abd al-Raḥmān がそこに三、四日泊逗留している間に、クタイバがホラズム人とブハラ人たちに伴われて到着し、次のように言った。「ひとたび我々が人びとの庭に降り立てば、警告を受けていた者たちの朝はなんと忌々しいものとなろうことか[コーラン 37:177]」と。クタイバはソグド人たちを一カ月の間、包囲した。包囲中、ソグド人は同じ方向から数回にわたりクタイバの兵士と戦った。ソグド人たちは包囲の恐怖におびえ、シャーシュ(Shāsh 石国)国王とフェルガーナ Farghānah 国王のイフシャード Ikshād に対し、書簡を送った。「もしアラブが我々を破滅させるなら、次はあなたがたを同様な目にあわせるでしょう」と。シャーシュ国王とイフシャード、およびその側近たちは、ソグド人の救援に出かけることに同意し、返書を送った。「陽動作戦を取れ。そうすれば、我々はアラブ軍のキャンプに夜襲をかけることができるだろう」。

‘Ali は語った。かれらは貴族(marzubān)の息子たち、騎士階級(asāwirah)、武力に秀でた勇者の間から騎兵を選び、アラブ軍キャンプに夜襲をかけるように命じ、かれらを出発させた。ムスリムたちのスパイがこの情報をつかんできた。クタイバは300人——あるいは600人——の勇士を選び、かれらを Ṣāliḥ b. Muslim に統率させ、クタイバが敵のやってきそうなところと恐れた沿道に派遣した。Ṣāliḥ はスパイを放って敵の情報収集につとめる一方で、かれは自軍のキャンプから2パラサング(約12km)のところで待機した。スパイたちが戻ってきて、今夜敵がここに到着するだろうと伝えた。Ṣāliḥ は騎兵隊を三班に分け、そのうちの二班を姿が見えないように隠し、みずからは道路上に留まった。多神教徒たち(mushrikūn)は夜分に行進し、Ṣāliḥ の部隊の存在に気づかなかった。クタイバのキャンプに到着するまでは、誰も攻撃してくる者はあるまいと信じこんでいた。かれらは Ṣāliḥ に面とぶつかって、ようやくそれに気がついたのである。

‘Ali は語った。Ṣāliḥ とかれの部下はかれら目がけて突撃し、槍の撃ち合いがはじまった。その時、隠れていた二班も飛び出し、交戦した。

‘Ali ← Barājim 部族のひとりが語った。「私はその現場にいた。私は人びとの戦闘のなかで、あの諸王の息子たちほど猛烈に、あるいは逆境にめげず勇敢に戦ったのを見たことがな

かった。逃亡したのは、かれらのうちのごくわずかな者だけだった。我々はいずれの武器を回収し、かれらの首を切り落とし、ある者は捕虜とした。我々の殺した人物についてかれらに尋ねると、『あれは国王の息子のひとり、あれは貴族のひとり、あれは勇士のひとり。あなたがたは一騎当百の強者たちを殺しました』と答えた。我々はいずれの言う通りに、それぞれの耳に名前を書き記した。朝になり、我々がキャンプに帰還した時、我々のなかで名前の記した首をぶら下げていない者は誰一人としていなかった。我々は戦利品として立派な武器、すばらしい品物、元気のよいウマを獲得した。クタイバはそれらすべてを分配品として我々に与えた」。

その戦闘はソグド人の気力をうち砕いた。クタイバはソグド人に対して投石機(マンジャーニク *manjanīq*, pl. *majānīq*)を据え、かれら目がけて発射し、止まることなく攻撃しつづけた。クタイバは連行してきたブハラ人やホラズム人たちから適切な助言を受けた。かれらも激しい戦闘に加わり、骨身を惜しまず自らすすんでそうした。ソグド国王グーラクはクタイバに非難のこぼえを伝えた。「あなたは私と戦うのにアラブ人ではなく、私の兄弟や同族にやらせているのではないか。アラブ人を前線に出して私と戦え」と。クタイバは怒り、*al-Jadali* を呼出し、「軍隊を檢閲し、最も勇敢な者を集めよ」と命じた。*al-Jadali* は軍隊を集合させた。そこでクタイバは自ら閲兵しはじめた。かれは小隊の司令官たちを呼出し、次々と点呼しながら小隊長に尋ねた。「おまえの部隊にはどのような人材がいるか」。小隊長は答えた。「かれが勇敢な男です」。「これはどうか」。「いくらかましです」。「あれはどうか」。「臆病者です」。クタイバは臆病な連中を“くず”と呼び、かれらの立派な武器を取り上げ、勇敢な兵士やいくらかましな兵士に与えた。臆病者には最も使い古した武器をあてがった。そうしてクタイバはかれらを前線に出し、騎兵と歩兵と両方で敵と対戦させた。クタイバは投石機(マンジャーニク)で城壁を砲撃した。城壁に破裂口が開いた。敵は穀物袋を積んで坑を塞いだ。ひとりの男が破裂口の上に立ち、大声でクタイバにむかって悪態をついた。クタイバは傍にいた射手隊に命令した。「おまえたちの隊から弓の名手二人を選び出せ」。かれらはそうした。クタイバは「よいか、二人のうちどちらかがあの男を射殺せよ。見事命中すれば、10,000ディルハムを取らせよう。もしくじれば、その手を切り落とす」と言った。ひとりの男はしりごみし、もうひとりが進み出て、見事に男の目を射抜いた。クタイバはかれに10,000ディルハムを取らせるように命じた。

‘Alī ← Bāhili 部族 ← Yaḥyā b. Khālid ← かれの父, Muslim b. ‘Amr のマウラーの Khālid b. Bāb が語った。「私はクタイバの射手隊のひとりだった。我々はその城市を征服した時、私は城壁の上に登り、あの男が立っていたところに行ってみた。かれは城壁の上で死んでおり、矢はまさしくかれの目を射て、うなじに貫通していた」。

翌朝、人びとは再び城壁を砲撃し、城壁に破裂口をあけた。クタイバは「あの坑から突入し、そこを越えよ」と叫んだ。人びとは敵と交戦しながら、ついに破裂口に接近した。ソグド人たちは矢を射て応戦した。アラブ人は盾を頭上にかざし、互いにかばいあいながら突撃し、つい

に突破口にたどりついた。その時、ソグド人たちがクタイバにむかい、叫んだ。「今日は戦いを止め、引きあげよ。そうすれば明日講和に応じよう」と。

Bāhilah 部族の間では、次のように語られている。「クタイバは叫んだ。『我々の兵隊が突破口にとりつき、我々の投石機がおまえたちの頭と城市を縦横に撃ち砕かないかぎり、講和に応じられないぞ!』と」。

Bāhilah 部族以外の学者の間では、次のように語られている。「クタイバは次のように叫んだ。『奴隷どもは恐怖に陥った。勝ち戦のまま、引きあげよう!』と。そうしてかれらは引きあげた。翌日クタイバはかれらと講和を取り決めた。講和の条件は次の通りであった。[1] 2,200,000ディルハムの歳貢を支払うこと。[2] 今年、30,000人の奴隷を提出すること。全員健康で、かつ少年や老人を含めないこと。[3] 城をクタイバに明け渡し、城内に戦闘能力のある人間をひとりも留めないこと。[4] クタイバのために、城内にモスク(masjid)を建立すること。クタイバがそこに入って礼拝でき、また内部に説教台を設け、クタイバが説教をおこない、食事をとり、立ち去れるように」。

‘Alī は語った。講和条約が締結された時、クタイバは10人の兵士——五部隊から二人づつ——を派遣した。かれらはソグド人が和約にもとづいて支払うものの受領にあたった。クタイバは言った。「今やかれらの兄弟や子供たちは我が手中に陥り、かれらの高慢な鼻はへし折られた」と。かくしてソグド人たちは城市を明け渡し、モスクを建立し、説教台を設けた。クタイバは自ら選んだ4,000人の部下を伴って入城した。城内に入ると、クタイバはモスクを訪れ、礼拝し、説教をおこなった。その後、昼食を取り、そしてソグド人に次のような通達を与えた。「自分の財産を持ち出したい者は、誰であれそうするがよい。私はこの城市から外へは出ない。この取り決めはおまえたちのためであり、和約にもとづくもの以外、私が奪い取ることはない。しかし城内には軍隊が常駐することになろう」。

‘Alī は語った。Bāhili 部族の間では、次のように語られている。「クタイバは100,000人の奴隷、拝火寺院(buyūt al-nīrān)、および偶像の装身具(hīlya al-aṣnām)の引渡しを条件に講和に応じた。クタイバはかれらと取り交わした和約にもとづき、それらのものを受領した。かれの下には剥ぎ取られた偶像(al-aṣnām)がつぎつぎと運ばれてきた。うず高く積み重ねられると、まるで巨大な建物のようになった。クタイバはそれらを燃やすように命じた。アラブ人以外の人びとはクタイバに言った。「その偶像のなかには、燃やした人の命を奪い、死に至らせるものがある」と。クタイバは「それでは、私が自らの手で火を付けねばなるまい」と言った。国王ゲーラクが進み出てクタイバの前にひざまづき、「あなたへの献身が私に課せられた義務であります。どうか崇りのあるそれらの偶像に身を曝さないでください」と言った。しかしクタイバは火を持ってこさせ、自らの手に燃え木を持ち、外に出た。そうして「神は偉大なり!」と叫び、偶像に火を付けた。他の人びとも、かれに倣って火を付け、偶像は激しく燃えた。偶像に使われていた金や銀の釘が焼け残り、集めると50,000ミスカル(約220kg)の重さがあった[Tabarī II, 1242-1246, tr., Vol.XXIII, pp.190-194]。

クタイバのサマルカンド都城攻撃については、短いながら中国側にも史料が残された。城内にたてこもってアラブ軍と激しく戦ったサマルカンド国王ゲーラク当人が、中国の皇帝(玄宗)に宛てて送った上表文中である。タバリーが記述するように、サマルカンドは93/712年にアラブに全面降伏し、征服された。国王ゲーラクを含め、戦闘能力のあるサマルカンド男性は皆城外に追放された。少なくともこの状況はクタイバの死(A.D.715)に至るまで変わらなかった。しかし、その後ブハラやサマルカンドのソグド人はホラーサーン・アラブ人の混乱に乗じ、共同してアラブ支配から離反した。100/719年にブハラ国王の篤薩波提(Tugh-shāda)とサマルカンド国王のゲーラク烏勒伽(Ghūrak)は、そろって玄宗皇帝に実情を訴え、救援を要請した(開元七年二月)。その上表文が『冊府元龜』巻999, 外臣部, 請求の条に収録され、今日に伝えられた。その中でサマルカンド国王のゲーラクはクタイバと交戦した模様を次のように報告する[Fig. 2]。

康国(サマルカンド)国王の上表文 (『冊府元龜』巻999, 外臣部, 請求)

開元7年(A.D.719/A.H.100)2月庚午, 康国(サマルカンド Samarqand)国王の烏勒伽(ゲーラク Ghūrak)が使者を派遣し、つぎのような上表文をたてまつった。

臣、烏勒伽が申し上げます。臣は天命を受けて全世界に君臨する皇帝陛下の百万里のかなた、その馬蹄の下の草土に類する奴僕であります。臣の種族ならびに諸胡の国々は旧来から誠心誠意、大国中国(唐朝)を慕い、いまだかつて反乱をおこしたことなく、また大国を侵略したこともありません。つねに大国のお役に立つように心がけ、行動してまいりました。ところがこの35年間というものは、たえず大食(アラブ)の賊軍と戦争し、毎年大軍の兵馬を出動させております。しかしながら、いまだに天子の恩恵によって中国から援軍を派遣していただく機会を得ていません。今より6年前、アラブの総大将の異密・屈底波(アミール・クタイバ Amīr Qutaybah)の率いる大軍がここに侵攻してきました。臣らと交戦し、臣らは大いに賊徒を撃破しました。しかし臣らの兵士にもまた多数の死傷者が出ました。大食(アラブ)の兵馬があまりにも多勢で、臣らの力で敵対することができなかつたためであります。臣は城内に立てこもり、防御を固めました。そこで大食(アラブ)は都城を包囲し、300基の投石機(抛車 manjanīq)を据え、城壁側面に三たび(あるいは三カ所)大坑をあけ、臣らの国都を陥落させんとしました。伏してお願い申し上げます。委細知り給う天子の恩恵により、多少の中国軍隊をこちらに派遣し、臣を苦難から救助し給いますように。聞くところによりますと、大食(アラブ)は百年間の強盛を保つのみといわれており、今年がその百年目あたります。もしも中国軍隊がこちらに来てくださるならば、臣らは必ずや大食(アラブ)を撃破することができましょう。

今、謹んで最良のウマー頭、ベルシア・ラクダー頭、ロバ二頭を献上いたします。もしも天子の恩寵深く、臣に贈物を賜りますならば、なにとぞ臣下の使者に付託して持ちかえらせ、途中強奪されることがありませんようお願いいたします。

其月庚午康國王烏勒伽遣使上表曰臣烏勒伽言
 臣是從天主曾天皇帝下百萬里馬踏下草上顛奴
 臣種族及諸胡國舊來赤心向大國不會反叛亦不
 侵損大國為大國行裨益士從三十五年來每共大
 食賊鬪戰每年大發兵馬不蒙天恩送兵救助經今
 六年被大食元率將異密屈底波領眾軍兵來此共
 臣等鬪戰臣等大破賊徒臣等兵士亦大處損為大
 食兵馬極多臣等力不敵也臣入城自固乃被大食
 圍城以三百批車傍城三穿大坑欲破臣等城固伏
 乞天恩知委送多少漢兵來此救助臣苦難其大食
 只合一百年強盛今年合滿如有漢兵來此臣等必
 是破得大食今謹獻好馬一波斯駱駝一驥二如天
 恩慈澤將賜臣物謂付臣下使人將來莫無侵奪

Fig. 2 サマルカンド国王
 ゲーラクの上表文
 (開元七年二月)
 Request presented
 toward the Chinese
 Emperor by Ghurak,
 King of Samarqand
 (A.H.100/A.D.719)
 『冊府元龜』(12冊)
 中華書局出版 1960
 卷999による

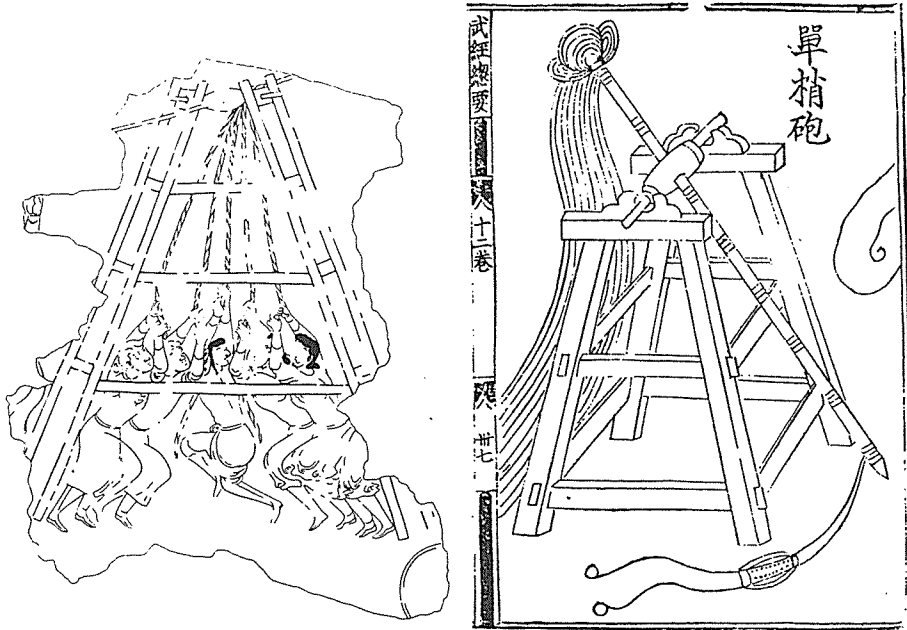


Fig. 3 投石機圖 ベンジケント壁画(左)と『武経総要』(右)
 Manjanik, from Penjikent by B.I.Marshak (left) and Wujing Zongyao (right)

この上表文はアラブの将軍アミール・クタイバ(異密・屈底波)の名前を中国側で記録した唯一の漢文史料である。上表文に「以三百拋車, 傍城三穿大坑」とあるのは、タバリーにアラブ軍がサマルカンド城を包囲し、マンジャーニクとよばれる投石機を用いて再度城壁に大坑をあけ、城内に突入しようとしたと述べられていたことと相応する。このような両者の一致は双方の史料価値、つまり信憑性の高さを裏付ける。「三百拋車」、「三穿大坑」といった数字は、この上表文ではじめて知りうる情報である。城壁に大坑をあけるには、よほど強力なマンジャーニク(投石機)が必要である。タバリーは別の箇所、アラブ軍が“ハト脚マンジャーニク(the Pigeon-Toed)”と呼ばれる特別仕立ての投石機を使用したことを述べているが⁵⁾、サマルカンド攻撃においても、それが使用されたのではないか。「三百拋車」の三百は台数ではなく、原文では三百人で操作する大型の投石機を意味していたかもしれない。同様にタバリーの記述からみて「三穿大坑」は、アラブ側の城壁破壊とソグド側の応急修理が二、三度くりかえされたことを意味し、「三たび大坑を穿つ」の表現ではないかと思う。

グーラクは上表文のなかで、イスラム・アラブが強勢を保つのは100年間のみと主張しているが、なにか根拠があったのだろうか。私は『タバリーの歴史』のなかに次のような話があるのに気づいた。「ヤズデゲルド3世はジャルーラ Jalūlā' の戦いでペルシア軍が敗北したのを知るや、レイ(現在のテヘラン南)に向かって逃走した。ヤズデゲルド王はラクダの背につけられたカゴに乗って移動した。その途中、居眠り、夢を見た。神の前にヤズデゲルド王とムハンマドがいた。神はムハンマドにイスラムに100年の権力を与えるといった。しかしムハンマドは神にもっと長い期間を要求し、神は110年とした。しかしムハンマドはさらに要求し、神は120年とした。しかしムハンマドは承知せず、多くを要求した。ちょうどその時、ヤズデゲルドの乗ったラクダが河の渡し場にさしかかり、従者は王が驚かないようにと、揺りおこした。王は神の最後のことを聞きそびれ、とても不機嫌であったという [Tabarī I, 2681, tr., Vol. XIV, p. 51]」。ヒジュラ暦100/A.D.719ころ、イスラム・アラブの強勢百年説が人びとの間で語られていたと思える。

V ソグドの神々

上に引用したタバリーの記述の最後に、サマルカンド征服に関する別伝史料が挙げられていた。つまり降伏の条件としてサマルカンド城内にある拝火寺院(buyūt al-nīrān)と偶像(al-aṣnām)との破壊であった。バラズリー『諸国征服史』のなかにも、ほぼ同じ内容の記述がある。

サマルカンド征服の別伝史料として。他の学者によれば、クタイバは貢納700,000ディルハム、およびムスリムに対して三日間の饗応と引きかえに、講和を許可したという。また降伏の条件には偶像の家と拝火寺院も含まれていた。偶像は投げ出され、装身具が剥奪され、ついで

燃やされた。それらの偶像のなかにはにそれを汚す者は、誰であれ生命を落とすとペルシア人たちの間で言い習わされた偶像がひとつまじっていた。しかし、クタイバは自らの手でそれに火を付けた。それを見て、多数の人びとがイスラム教に改宗した[*Balādhuri* : 421, tr., Part I, p.189]。

アラブ人はソグド人たちの宗教施設を偶像の家 (bayt al-aṣṣnām) や拝火寺院 (火の家 bayt al-nār) と呼んでいた。サマルカンド征服に先立つ91/710年に、クタイバは遠征の途上、ザラフシャン河沿いの集落で宿営したことがあった。そこにもこの二種の宗教施設が存在した。「そこには拝火寺院 (bayt al-nār) と神々の家 (bayt āliha) とが存在した。集落にクジャクがあり、アラブ人はその村をクジャクの館 (manzil al-ṭawāwīs) と呼んだ」とあり [Tabarī II, 1230, tr., Vol. XXIII, p.177], 「神々の家」と少し表現が異なっても、「偶像の家」というのと同種の宗教施設だった考えられる。

火の家 (bayt al-nār) というのは、一応ゾロアストラ教の拝火寺院と考えられるが、偶像の家 (bayt al-aṣṣnām) に安置されたソグドの神々の像が何であったか、タバリーやバラズリーの記述からは判断できない。多くの学者は仏像であろうと推定し、少なくとも仏像が含まれていたと推定した⁶⁾。当時のソグド人の宗教については、インド巡礼途上にサマルカンドに立ち寄った玄奘 (630年頃) と慧超 (727年頃) とが、次のような記述を残している。

玄奘が伝えるサマルカンド (颯秣建国) A.D.630頃

また西北の大きな砂漠の中に入る。水、草なく、白骨を望みながら進む。五百里あまり行き、颯秣建国 (サマルカンド、康国) に到着した。王および百姓は仏教を信奉せず、火を崇拜することを、正しい道と考えていた。仏寺が二カ所あるが、長らく無住の寺院であった。客僧が投宿しようとする、住民たち (諸胡) が火をかざして追い払い、宿泊することを許さなかった。玄奘法師が最初に訪ねたときには、国王の対応は傲慢であった。しかし、しばらく滞在して国王のために、人天の因果、讚仏の功德、恭敬の福利を説いたところ、王は歓喜し、自ら進んで斎戒を受けようとした。対応も懇懇になった。玄奘法師に随行した二人の若い僧が寺院に出かけ、礼拝しようとしたとき、またもや住民たちが火で追い払った。二人の若い僧 (沙弥) は戻って、国王に報告した。王はそれを聞き、火で追い払った者を逮捕させた。かれらを引き立て、百姓を集めて、その手を切り落とさせようとした。玄奘法師は善行を勧めようと思い、また肢体を切断することにはとても耐えがたく、取り止めるように王に願いでた。そこで王はかれらを厳しくムチ打ち、都城の外に追放した。この事件があつてから、人びとは肅然として、仏教信仰を求めようになった。そこで大がかりな説法会を催し、そのときに得度 (出家剃髮) させた者を寺院に住ませた。このように玄奘法師は至る所で人びとの邪心を正し、悪い風習に染まった人びとを教化した [『大慈恩寺三蔵法師伝』第2巻]。

慧超が伝えるサマルカンド諸国 A.D.727頃

またアラブ国(大寔)より以東は、すべて胡国(ソグド系諸国)である。すなわち安国(Bukhārā), 曹国(Ushurūsanah), 史国(Kishsh), 石驪国(Shāsh?), 米国(Maymurgh), 康国(Samarqand)などである。それぞれに国王が存在するけれども、みなアラブ人に支配統治される。国の領域が狭小であり、兵・馬の数が多くなく、自衛独立することができない。土地はラクダ, ラバ, ヒツジ, ウマ, 棉布の類を産出する。衣服は木綿の上着, ズボンなど, および毛皮のものを身に着ける。言語は他の諸国とは異なる。

またこの六国はすべて火祇(ゾロアストラ教)を信奉し、仏教を理解しない。ただ、康国(Samarqand)には仏寺が一つ存在し、一人の僧侶がいる。しかし三宝を敬信することを知らない。これらの胡国はみな鬘, 髪を切り、好んで白い木綿帽子をかぶる。極悪の風習は乱れた婚姻関係である。母および姉妹を妻とする。波斯国(ペルシア)もまた母を妻とする。吐火羅国(トハリスタン)から、罽賓国(Kābul), 犯引国(Bāmiyān), 謝颺(Zābul)などに及ぶ諸国は、兄弟十人, 五人, 三人, 兩人が一人の妻を共有し、それぞれが一妻をめとることは許されない。家計が破綻するのを恐れるからである[慧超『往五天竺国伝』胡国条]。

玄奘, 慧超とも当時のソグド人たちの多くが拜火教徒つまりゾロアストラ教徒であり、仏教を理解し、信仰するものはいないと断言した。それでも、サマルカンドには一、二の無住の仏教寺院が残存していると述べているのは、かつてサマルカンドに仏教信仰が浸透し、多くの仏教寺院が存在したことを示唆するかのようである。玄奘はサマルカンドから南下し、ヒンドゥクシュ山脈を越えて、かつての仏教および美術のセンターであったガンダーラ(健駄邏国)に入り、そこにおいても仏教が衰退し、土着信仰が復活していることを述べる[『大唐西域記』巻2]。

ガンダーラ国……仏教寺院は千余所あるが、建物は壊れ、草が生い茂って、ものさみしいありさまである。多くの仏塔(ストゥーパ)も崩壊したままである。天祠が百余所あり、種々の宗派が混じっている。(僧伽藍千余所, 摧殘荒廢, 蕪漫蕭條。諸窣堵波頗多頽圯。天祠百数, 異道雜居。)

天祠, 異道が多いというのは、ヒンドゥ教土的着信仰を指すとおもえる。ガンダーラ地方はイスラム・アラブの侵攻以前において、既に仏教は衰退し、その後ヒンドゥ教土的着信仰の復興期をはさんで、イスラム時代が到来したのである。ソグド地方もおそらく同じ趨勢のなかにあったようにみえる。先に紹介したマルヴの仏教寺院の活動期間が4～6世紀であったことも、それに呼応しよう。従ってクタイバの手で焼かれた偶像のなかに、仏教廢寺からの仏像も混じっていた可能性があるが、その多くは当時ソグド人の信仰していた神々の像であったとおもえる。ではそれらの神々が具体的にどのような姿であったか。7, 8世紀当時のソグドの神々の図像については、近年のペンジケント, アフラシアーブなどの都城遺跡から発掘された壁画中に見ることができるようになった。ペンジケントの発掘を担当したマルシャク

B. I. Marshakによれば、ソグド地方のゾロアストラ教はササン朝ペルシアの国家宗教的ゾロアストラ教と異なり、教義や礼拝に国家的規制が及んでおらず、古来からの土着信仰が混在するものであった。ソグドの壁画にはブツダ像はひとつも見いだせなかったが、しかし仏教がもたらしたインドの神々が土着の神々と混淆した姿で描かれ、崇拜されたという。たとえば、三面の顔をもつヴェシュパカル Veshpakar 神はインドのシヴァ神、三つの目をもつアドバグ Adbag(アフラマズダ)神はインドラ神、大髭をもつズルヴァン Zurvan 神はブラフマー神の姿で表現された。その他、ライオンに乗る四臂女神のパールヴァティー(シヴァ神の妃)、ナーラーヤナ那羅延(ヴィシュヌ)神、ヴァイシュラヴァナ毘沙門天などのインド神が、ソグドの神々に加えられている⁷⁾。

現在のところ、中央アジアの考古学者は偶像を伴わない拝火壇のみのゾロアストラ寺院遺跡を発見していない。はたしてソグド地方において「偶像の家」と「火の家」が判然と区別されていたかどうか不明である。しばらく考古学発掘調査の成果を見守る必要があるだろう。

VI むすび

ホラーサーン総督のクタイバは715年に就任したカリフ・スライマーンに反旗をひるがえし、任地で自滅した。スライマーンをついだカリフ・ウマル2世(A.D.717-720)は敬虔なイスラム教徒としてホラーサーンの辺境政策について種々の変革を試みた⁸⁾。そのひとつはイスラム教徒としてアラブと非アラブ(マワリー *mawālī*)との間に存在する差別を撤廃することであった。

A.H.100/A.D.718-719……ウマル 'Umar は al-Jarrāḥ (ホラーサーン州総督)に次のような書簡を送った。「あなたとともにメッカの方角(qiblah)に向って祈る人は、誰であれ、賦税(ジズヤ *jizyah*)は免除されるべきである」と。その結果、多数の人びとがジズヤを免除されるために、急いでイスラム教に改宗した[*Ṭabarī* II, 1354, tr., Vol.XXIV, p.83]。

しかし、総督のジャッラーフ al-Jarrāḥ は人びとが割礼をしていないことを口実にジズヤの免除を拒んだので、ウマル2世は総督を更迭した。さらにウマルは新総督に対し、征服戦争の中止を命令した。

A.H.101/A.D.719-720……ウマルは 'Abd al-Raḥmān (ホラーサーン州総督)に返書を与えた。「神かけて私はすでに義務を遂行した。それゆえムスリムたちをいかなる遠征にも派遣するな。神がすでにかれらに与え給うた勝利に満足させよ」[*Ṭabarī* II, 1365, tr., Vol.XXIV, p.95]。

これ以上、掠奪行為や殺戮戦争のための辺境拡大は不要であり、和平の実現に努力せよという。ウマルは同じ和平の精神に立って、征服地における非イスラム宗教施設の破壊をも禁止した。

'Abd al-Raḥmān b. Nu'aym (総督)は 'Umar から次のような書簡を受け取った。「あなたがたと締結された協定を尊重して、キリスト教の教会(kanisa)、ユダヤ教のシナゴーク(bi'a),あ

るいはゾロアストラ教の拝火寺院 (bayt nār) を破壊してはならない。新しい教会 (kanisa) や拝火寺院 (bayt nār) の建築については許可するな。大量虐殺の土地に子羊をひきずるな。あるいは家畜の頭上にナイフを鋭くするな。祈る人ふたりをことわりなくして、いっしょに結びつけるな」と⁹⁾ [Tabari II, 1371-2, tr., Vol. XXIV, p.101]。

こうした恩情あるウマルの政策は実現がむずかしいばかりでなく、かえってホラーサーン地方の情勢を悪化させる結果をまねいた。ホラーサーン総督ハラシー al-Ḥarashī の時 (103/721-722年)、多くのソグド人がイスラム教から離反し、アラブの支配を脱してフェルガーナに逃避した。ペンジケント領主のディーワーシニー Dīwāshinī は住民を率いてザラフシャン河上流にむかった。しかしフェルガーナ国王は人びとを受け入れず、かえってアラブ軍に通報してソグド人の虐殺に手をかけた。最後の和平交渉にアラブ軍営に赴いたディーワーシニー自身も磔殺された [Tabari II, 1439-1448, tr., Vol. XXIV, pp.169-178]。

1932-33年にかけて、ザラフシャン河上流のムグ山城址から紙、羊皮、木棒にかかれた80点あまりの古文書、およびその他の遺物が発見された¹⁰⁾。文書の大部分はソグド語であるが、アラビア文1通、漢文若干が混じっていた。ソグド文書、アラビア文書にはペンジケント領主ディーワーシニー (ディワシュチ) の名が記されており、最後にムグ山城にたてこもり、アラブ軍と戦闘したペンジケントの人びとの所有物であることが判明した。ムグ山城出土のソグド、アラビア文書のもつ歴史、言語学的価値はいうまでもないが、タバリーの伝える歴史の詳細さ、その信憑性にもあらためて私は感心する。また最近のペンジケント都城址の発掘も、逃避行ののちにアラブ人の手で焼き払われたディーワーシニーやその他の貴族たちの邸宅、神殿の状況を明らかにしつつある。私たちはそれらの建物の壁画にソグドの神々の図像を垣間見ることができた。

A.H.110/A.D.728-729年に、ホラーサーン総督のアシュラス Ashras はソグド人に対し、イスラムに改宗すれば、ジズヤ jizyah (賦税) は免除されると約束した。人びとはそれを受諾し改宗した。しかし Ashras は依然としてジズヤを課し続けたので、人びとはまたもやアラブとの交戦を余儀なくされた [Tabari II, 1507-1510, tr., Vol. XXV, pp.46-48]。このたびのジズヤ戦争には、中央アジア遊牧民族のトルコ人がソグドに加担したので、戦闘はさらに熾烈さを増した。アラブ人に対するソグド人の抵抗運動は、一方でウマイヤ朝支配に反対する他のアラブ人勢力と合流し、ホラーサーン地方からアッバース朝革命運動が拡大していった。A.H.132/A.D.749-750年に成立したアッバース朝政権はもはやアラブ至上主義の帝国ではなく、イスラム教徒の世界帝国を目指したといわれる。その背景には非アラブ・イスラム教徒の人口増大とそれら人びとのアラブ、非アラブ間の差別撤廃の強い要求があった。逆にいえば、こうした抵抗の過程を経て、バルシア、ソグド人たちは徐々に旧宗教を捨てて、イスラム教徒として新しい宗教、生活、文化に適應していったのである。

注

- 1) マルヴ遺跡国際調査プロジェクト1993, 1994, 1995年度の報告は次のとおりである。Herrmann, G., Masson, V. M. and Kurbansakhatov, K., et al. (1993) The International Merv Project, Preliminary Report on the First Season. *Iran XXXI* : 39-62, pls.xii-xviii. Herrmann, G. and Kurbansakhatov, K., et al. (1994) The International Merv Project, Preliminary Report on the Second Season 1993. *Iran XXXII* : 53-75, pls.iv-viii. Do. (1995) The International Merv Project, Preliminary report on the Third Season 1994. *Iran XXXIII* : 31-60. 十字架のペンダント(型)については, 上記 *Iran XXXII*, pl. vd に写真が載せられている。1996年7月6, 7日に金沢大学文学部で開催された研究会「西アジアの考古学——ヘレニズム～イスラーム」の席上で, マルヴ・プロジェクトのメンバーの一人, St. J. Simpson 氏(大英博物館)に会い, 直接マルヴの発掘状況を聞く機会をえた。
- 2) Pugachenkova, G.A. and Usmanova, Z.I. (1994) Buddhist Complex in Gyaur-Kale of Old Merv. *Vestnik drevnei istorii, Moskva* : 142-171. 加藤九祚(1995)メルヴの仏教僧院址研究ノート『創価大学人文論集』7 : 114-143は, 上記のロシア文報告にもとづいて, マルヴの仏教寺院址について紹介したものである。
- 3) Nizak がクタイバから逃亡し, 殺害される過程については, *Ṭabarī II*, 1205-27, tr., Vol.XXIII, pp.153-174, Nizak とエフタルとの関係については *EP²*, Hayāṭila の項, および Esin, E. (1977) Tarkhan Nizak or Tarkhan Tirek ? *JAOS* 97(3) : 323-332参照。
- 4) 漢文史料に記されたソグド国王名とアラビア, ソグド文およびソグド貨幣に記された国王名との比定研究については, 岡本孝(1984)ソグド王統攷——オ=イ=スミルノワ説批判を中心として——『東洋学報』65(3, 4) : 71-104に詳しい。
- 5) ハト脚投石機(Manjanīq^{an} kāna yusammī-hā al-fahjā')のことは *Ṭabarī II*, 1230, tr., Vol.XXIII, p.179 に記す。B. I. Marshak はベンジケントの壁画中(8世紀初)にマンジャーニク(投石機)が描れていることを指摘する[Azarpay, G. 1981 : figs. 28, 29]。部分的にしか残存しないが, 中国の兵書に見られる抛(砲)車図に類似する。曾公亮, 丁度編『武経総要』(1044年刊)巻12には, 有輪式あるいは無輪固定式の投石機16種を挿図とともに記載する。固定式投石機は木製四脚の砲架を立て, 頂上の支点に棹(砲梢)を通し, 一方の端に曳き綱を, 他方に砲丸(石)を取り付ける。投石機の威力の大きさは棹の長ささと太さ(単梢～七梢)により, 七梢砲は曳き手250人, 約60kgの石を75m飛ばすという(本文挿図 Fig. 3参照)。
- 6) Hitti, P. K. (1937) *History of the Arabs*. London : 209は偶像=仏像と考えた。岩永博訳(1982)『アラブの歴史』上 講談社学術文庫 : 406参照。ただクタイバの偶像破壊に関する箇所日本語訳は誤解を招く。偶像中に仏像をも含むと考える学者には, Litvinsky (1968) : 66, Stavisky (1994) : 128などがある。なお Stavisky (1994)は, 現在にいたるまでに旧ソ連領中央アジアで発見された仏教遺跡を27ヶ所挙げている。バクトリア地方(トハリスターンとその北部の南ウズベキスターン, タジキスターン, 東南トルクメニスターン)17, セミレチエ(北キルギスターン, チェウ河流域)7, マルヴ(ムルガープ下流域, トルクメニスターン)2, ソグド地方(トランスオクシアーナ)1, フェルガーナ1, である。ソグド地方の仏教遺跡は現在のところはなはだ乏しいといわざるをえない。

- 7) Belenitskii, A.M. and Marshak, B.I. *The Painting of Sogdiana*. Azarpay (1981) : 28-35参照。上記書で取り上げられている壁画の一部は1985年に日本において展覧された。カタログ『シルクロードの遺宝——古代・中世の東西文化交流』日本経済新聞社 1985。その中に炭化した木彫(ペンジケント出土, Nos.90, 91)があり, 7~8世紀当時ソグド地方に壁画, 金石, 塑像のほか木製彫像が存在したことがうかがわれる。
- 8) ウマル2世の政策については, 嶋田襄平(1969)ウマル2世の租税政策とその遺産『中央大学文学部紀要』55, 嶋田襄平(1996) : 161-178所収参照。
- 9) この文章はウマル2世の伝記として, タバリーの歴史に後補された部分にあたる。
- 10) ムグ山城出土の古文書の図録は *Corpus Inscriptionum Iranicarum*. Part II, Vol. III, *Documents from Mt. Mugh*. Moscow, 1963によってみる事ができる。

参考文献

- Balādhurī* : Aḥmad b. Yaḥyā al-Balādhurī, *Futūḥ al-buldān*. Tr., by P.K. Hitti and F.C. Murgot, *The Origins of the Islamic State*. 2 vols. AMS Press, 1969.
- Ṭabarī* : Muḥammad b. Jarīr al-Ṭabarī, *Ta'riḥ al-rusul wa-l-mulūk*. Ed. by M. Abū al-Faḍl Ibrāhīm, 11 vols., Cairo 1960-77, Reprint Bayrūt. (*The History of al-Ṭabarī, An Annotated Translation*. 38 vols., State University of New York Press, Albany, 1985-1996). Vols. 5, 8, 16 unpublished yet. (Vols. 8, 16 については, このほど出版, 入手できた。1997年5月補記)
- Narshakhī* : Muḥammad b. Ja'far Narshakhī, *The History of Bukhara* (tr., by R. N. Frye). Cambridge, Mass, 1954.
- Azarpay, G. (1981) *Sogdian Painting*. Berkeley, Los Angeles, London.
- Barthold, W. (1928) *Turkestan down to the Mongol Invasion*. London.
- Chavannes, E. (1923) *Documents sur les Tou-Kiue(Turcs) Occidentaux*. St. Petersburg.
- Frye, R. N. (1975) *The Golden Age of Persia : Arabs in the East*. London.
- Gibb, H. A. R. (1923) *The Arab Conquests in Central Asia*. London.
- Litvinsky, B. A. (1968) *Outline History of Buddhism in Central Asia*. Moscow.
- Markus Mode (1993) Sogdian Gods in Exile : Some Iconographic Evidence from Khotan in the Light of Material Excavated in Sogdiana. *South Asian Archaeology 1991*. Stuttgart, 561-566.
- Shaban, M. A. (1970) *The Abbasid Revolution*. Cambridge.
- Stavisky, B. J. (1994) The Fate of Buddhism in Middle Asia : in the Light of Archaeological Data. *Silkroad Art and Archaeology*. III, Kamakura, 113-142.
- 慧立・彦棕(1983)『大慈恩寺三藏法師伝』(中外交通史籍叢刊)中華書局。
- 慧超著・張毅箋釈(1994)『往五天竺国伝箋釈』(中外交通史籍叢刊)中華書局。
- 前嶋信次(1971)タラス戦考『東西文化交流の諸相』誠文堂新光社, 129-200。
- 嶋田襄平(1996)『初期イスラーム国家の研究』中央大学出版部。
- ヤクボーフスキー他(加藤九祚訳)(1969)『西域の秘宝を求めて』新時代社。